

早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「トランスナショナル社会と日本文化」主催

## 国際シンポジウム 南蛮史料研究の新地平

International Symposium: Newer Stage for Namban Historical Source Studies

本部門では、従来、キリシタンの世紀、大航海時代などの用語とともに専門分野として認識されてきた知識体系を、あえて南蛮という視覚から、キリスト教文化、南ヨーロッパ中心の国際展開とは異なる枠組みでとらえ直すとの意図のもとに、上記国際シンポジウムを2020年(令和2年)1月11日に主催した。紙面の都合上、プログラムは省略する<sup>(1)</sup>。本特集は、この国際シンポジウムの活字版である。掲載順に執筆者氏名を列挙すると次のとおりである。Paula HOYOS HATTORI / パウラ・オジョス・ハットリ、岡本真 / OKAMOTO Makoto、José Miguel PINTO DOS SANTOS / ジョゼ・ミゲル・ピント・ドス・サントス、Charles Julius BORGES / チャールズ・ジュリウス・ボルジェス、Timon SCREECH / タイモン・スクリーチ、川田玲子 / KAWATA Reiko、児嶋由枝 / KOJIMA Yoshie、成澤勝嗣 / NARUSAWA Katsushi、谷口智子 / TANIGUCHI Tomoko、伊川健二 / IGAWA Kenji、滝澤修身 / TAKIZAWA Osami、根占献一 / NEJIME Kenichi。いずれも全体テーマに関して独自性の際立った研究実績のある論者であり、本来ならば単行本として刊行しうる内容であるが、開催資金の規則上の制約により、学術雑誌である本誌を媒体として選択することとなった。

国際シンポジウムの準備、当日の進行と同様に、本稿のとりまとめに際しても、主催者側から報告者への要望などは最少限に留める方針で臨んだ結果、後掲の諸原稿の体裁は、報告者の希望により、録音起こしを基本とするもの、当日の原稿を基本とするもの、後日文章化したものが混在することとなっている。主催者、報告者、さらには聴衆すべての負担を極力低減するため、報告言語をあえて、英語にも日本語にも統一せず、それでいて他方にもなるべく配慮をする、といういわばゆるい方針が、シンポジウム当日にはおおむね好評であり、本特集においても、その雰囲気を伝えることに留意したいと考えた結果である。さらには、昨今日本でも増加しつつある、編者による個別原稿への積極的介入が、はたしてどれほど内容の改善につながっているのか、という個人的な疑問も、上記方針の背景にあることも付記したい。プログラム記載の報告タイトルと、当日おこなわれた報告タイトルが変更されたものも一部存在するが、双方そのままに掲載している。報告者の所属は、シンポジウム開催時点のものである。

なお、開催にあたっては、早稲田大学ラテンアメリカ研究所、早稲田大学多元文化学会、早稲田大学文化構想学部多元文化論系、早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「グローバル化社会における多元文化の構築」に共催のご賛同をいただいた。また、スーパーグローバル大学創成支援事業(SGU)にもとづく国際シンポジウム等開催助成、科学研究費・基盤研究(C)「ルイスフロイスによる日本情報に関する総合的研究」(研究代表者:伊川健二)、および本部門の資金にて実施した。関係各位へは改めて謝意を表す。(伊川健二)

(1) 早稲田大学総合人文科学研究センターのサイト (<https://www.waseda.jp/flas/rilas/news/2019/11/25/6780/>) 参照。